

檜葉の神輿

著者	黒田 一充
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	72
ページ	6-9
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023827

檜葉の神輿

黒田 一 充

神社では、祭りの日に神が旅をすると考えられ、祭神の乗り物として神輿が担がれる。神輿は精巧な木彫が施され、漆や金箔などの豪華な装飾で飾られた人目を引く存在である。神輿の数は、祭神の数だけ出るところもあるが、1基か子ども神輿を加えた大小2基のところも多い。しかし江戸の町では、神社の神輿とは別に、町内ごとに神輿を出して祭りに参加した。

現在も東京都千代田区の神田明神では、2年に一度の神田祭の本祭りに氏子区域の108の町内から大小200を越える神輿が出され、その豪華さが競われる（写真1）。祭りの当日の宮入りでは、神田明神の境内に各町の神輿が順番に担ぎ込まれて終日にぎわう。



写真1 神田祭の神輿の宮入り（2013年）

このような豪華な装飾をした神輿は、平安時代後期には現れていたようである。『平家物語』（御輿振）には、安元3年（1177）4月に延暦寺の僧兵たちが日吉社の神輿を担いで強訴をした記事があり、「御神宝天に輝いて、日月地に落ち給ふかと驚かる」として、神輿が装飾で輝いていた記述がある。同じころに制作された『年中行事絵巻』（巻9）にも、四面に鏡や飾りを吊した祇園御霊会の神輿が描かれている。

しかし、神輿のことを記した初期の史料では、それほど豪華な飾りはなかった。天慶8年（945）7月には、志多羅神などをまつた神輿3基が群集とともに平安京に近づいてきたとする『本朝世紀』の記録がある。3基の神輿のうち、1基

は檜皮^{ひわだ}で屋根を葺き、側面に鳥居の飾りがあったが、他の2基は檜葉^{ひば}で葺いて鳥居がないものだったと記している。数日後に神輿の数は6基に増えたようだが、檜皮葺きに対して檜葉を葺いた神輿は、いかにも急ごしらえの印象を受ける。

同書や『日本紀略』の正暦5年（994）6月27日条に、平安宮の北にある船岡山で行われた御霊会の記事がある。疫神を鎮めるため、木工寮修理職が2基の神輿をつくって安置し、多数の人が参加して祭りが行われ、その翌日には難波の海へ流すために神輿は運ばれたという。一日だけで海に流すため、それほど豪華な装飾の必要はなかったと思われる。

このような簡素なつくりの神輿は、その後もつくられたことが史料に見える。京都・松尾社の4月の祭りでは、6基の神輿が西七条の旅所に運ばれたが、貞享2年（1685）の『日次紀事』には、別の神輿のことも記している。

西七条の旅所の近くにあった武御前の神輿を毎年白木でつくって桂川の東岸に棄て、翌日児童がこれを昇いて壊し、その木片を厠に挿しておくことと疫病を祓うことができたという。文化3年（1806）の『諸国図会年中行事大成』では、この狭神輿^{さかみ}は棄てられず、棄てるまねだけして旅所に持ち帰るようになっており、「寝ほれの御前」とよばれていたという。川に棄てるのは疫神などを追い出す行為であり、棄てて壊すため簡素なつくりの神輿だったのであろう。



写真2 下飯田町の杉葉の神輿（2008年）

現代でも、川などに棄てるための神輿がある。浜松市南区下飯田町・六所神社では、8月の祇園祭に杉葉の神輿をつくる。神輿は90センチメートル四方の大きさで、屋根の棟の両端は角のように上がり、その先端までの高さも約90センチメートルである。祭りの日には「ヨイトー、モイトー」と唱えながら子どもたちが担いで地区内を廻り、若衆たちが集落の東側を流れる安間川に流していた。後には焼却して灰を川に流すようになり、現在は1年間神社でまつっておき、翌年に新しい神輿をつくった後、燃やしている（写真2）。

千葉県袖ヶ浦市野田では、7月31日に虫送りが行われる。午前中に野田神社の境内で、大人たちが竹で円錐形の骨組みをつくり、中心の竹に御幣を付ける。周囲を檜葉で覆って頂上に藁と竹の皮でつくった鳳凰を載せる（写真3）。神輿が完成するお昼ごろになると、子どもたちが集まってくる。昔は男の子だけの行事だったが、今は女の子も参加する。

神輿を御神酒で清めた後に子どもたちが担ぎ、御幣を付けた女竹を持った子どもを先頭に「ワッショイ、豊年」と叫びながら地区内の各家を廻る。家の前では「わーい」と叫んで神輿を上下に揺らした後、祝儀やお菓子などをもらう。女竹は途中、3か所の水田の水口に挿していく。夕方、集落内のすべての家を廻ると、集落の外れにある野田堰というため池に神輿を棄てて、稲につく害虫を追い出す。虫送りに藁人形などを使うところは多いが、神輿で行うところは珍しい。

茨城県では、旧暦6月に青屋箸といって、ススキの箸でうどんを食べる民俗があった。石岡市総社の青屋神社では、ススキで小祠の屋根を葺く青屋祭が行われている。小美玉市・立延地区の7月の青屋祭でも、子どもたちがススキを刈って各家に配るが、別に青竹を骨組みにし、周りを茅で覆った小屋をつくっていた。完成すると内部に御幣をまつり、田んぼの中を担いでいく。集落を流れる園部川に着くと「お精進」という場所で神輿を流した。子どもが集まる



写真3 野田の虫送り（2015年）

儀礼は続いているようだが、茅の小屋はつくらなくなったとのことである。これも、虫送りの儀礼だと考えられる。

千葉県八千代市吉橋でも、1月下旬の大杉様の行事で子どもたちが青竹と杉葉でつくった神輿を担ぎ、「あんば大杉大明神、悪魔を祓ってヨーヤイヤサ」と唱えながら各家を廻り、大杉神社に納めていたが、現在は行われていない。いずれも疫神などを神輿に集め、祭りの後に壊したり棄てたりすることに意味がある。

それらとは別の、祭神を乗せて氏子地区を廻る神輿も見ていきたい。

愛媛県宇和島市吉田町知永の門島神社では、毎年10月の祭りにシダ神輿がつくられる。シダ神輿は、太い青竹を芯にしてウラジロで鳳凰をかたどった高さ150センチメートルほどのものである。下部に注連を巻いてあり、体内に大きな鈴を吊しているため、揺らすと大きな音が鳴る。



写真4 知永のシダ神輿（2008年）

午前中に大人たちも手伝ってつくり、午後から、小中学生たちが牛鬼とシダ神輿を担いで地区内の全戸を廻る。牛鬼は、青竹の先に面を着け、赤い布を胴体にしてている。各家では、まず牛鬼が玄関口から中へ「ウェーウェーウェー」といいながら3回首をつっこむ。その後、「ヤーヤーヤーヤー、ヤー」という掛け声とともに背後でシダ神輿を大きく上下に揺らす。付添う方にうかがうと、昔の神輿はもっと大きく、数も2基だったという(写真4)。



写真5 神宮の藁神輿(2014年)

愛媛県にはもう1か所、植物でつくる神輿がある。今治市神宮の野間神社では、10月の秋祭りの前に、稲藁でつくった藁神輿を子どもたちが担いで氏子の地区を廻る。高さは約85センチメートルで、2枚の羽と12本の尾を持つ鳳凰を飾り、背中に御幣を付けた榊の枝を挿している。かつては氏子地区ごとにつくっていたようだが、今は使い回しており、藁神輿を担ぐ子どもたちも7つの氏子地区全体から集まってくる。

藁神輿を担ぐのは連日ではなく、10月に入った7日間の日程で行われる。一日ずつひとつの集落内の家を廻ってお菓子をもらい、最後に神社に運んで楼門のところに置いて帰る(写真5)。次の地区の日になると、子どもたちが神社に取りに来て、同じように地区内を担いで廻って神社に戻す。春祭りに子ども神輿がなかったため、現在は春にも藁神輿がつくられている。

滋賀県大津市仰木(下仰木)の八坂神社では、8月15日の祭りに笹神輿が出る。祭神が牛頭天王であるため、農耕用の牛が病気にならないよう祈る祭りで、牛を飼っている農家が青竹を1本ずつ奉納し、それを材料にして笹神輿をつくったという。その後、牛を飼う家がなくなって行事自体も中断していたものが復活されている。

祭りの前日に神輿をつくる。青竹の担ぎ棒の中央に約1メートル四方の土台を組み、その上に青竹で四角錐の骨組みを組み立てる。骨組みができると笹で覆い、頂上に御幣を挿し、全体を花で飾る。大きさは高さ1メートルぐらいだが、昔は祭神にあわせて大中小の3基の笹神輿がつくられたという。

祭りは昼前に神事があり、その後集まった地区の人たちの行列が出発する。太鼓を先頭に、子どもたちが笹神輿を担ぎ、その後ろに御幣を付けた檜の大枝が進む。大枝は、根元ではなく、葉の茂った方を前にし、紐をくくり付けて地面を引きずっていく。この大枝は、牛を表すのだ



写真6 下仰木の笹神輿(2015年)



写真7 味見河内町の柴神輿（2007年）

という。1時間ほどで区内を一周し、神社に戻ると餅撒きをして解散する（写真6）。神輿はその日の午後解体する。

これらはいずれも子どもたちが担ぐ神輿であるが、大人が担ぐ神輿にも植物の葉でつくるものがある。

福井市味見河内町の住吉神社で5月5日に行われるじじくれ祭りには、柴神輿が出る。早朝から準備が始まり、青竹を井桁に組んで杉葉や椿の枝などを角形に結んで台座をつくり、その上にブナの葉やシデの葉をさしこむ。神輿の中央には神社の祭神3神の御神体を表すショウブ・コブシ・ヤマブキの花を立てる。

完成すると拜殿で神酒を掛けて祝詞をあげ、法被姿の若者たちが担ぎ、最初に両手で差し上げてくるくる回った後、境内に飛び出し、そのまま神歌を唱いながら集落へ駆けていく（写真7）。くるくる回るのは、神輿に祭神を下ろす所作だと思われる。集落内を廻って神社に帰ってくると、待ち受けていた人びとが集まってきて神輿を壊して御神体の花を奪い合う。かつては子ども神輿もあったようで、春の訪れを祝う祭りだという。

神輿が毎年つくられなくなる過渡期の様子を伝えるものもある。

福岡県香春町採銅所は香春岳の北麓の地で、古くから付近で銅が採掘された。大分県の宇佐八幡宮の放生会に銅鏡を納めた場所として、八幡信仰と関係が深い。この地にある古宮八幡神社は、香春岳をまつる香春神社の元宮だとする伝承があり、明治時代まではこの神社の神輿が香春神社まで運ばれた。現在4月下旬の祭りでは、神輿が境内から下ろされ、古宮音頭（伊勢音頭）を唱いながら区内を廻った後、神社の



写真8 古宮八幡神社の杉葉の神輿（2015年）

石段下にある御旅所で一泊する。

この神輿は、屋根が5段になっており、毎年杉葉で新しく葺くのが特徴である（写真8）。御旅所の近くには、神社から下りてくる神輿を迎えるために、さまざまな色の紙をつかったバレンで飾られた5つの氏子地区の子ども山笠が集まってくるが、その屋根も杉葉で葺いている（写真9）。『香春町史』によると、杉葉の神輿は、中断していた香春神社の神幸祭が再興された宝暦6年（1756）の記録までしかさかのぼることはできないが、それ以前の古い姿を残している。

檜葉・杉葉・シダなど種類は異なるが、植物の葉でつくったこれらの神輿の事例は、豪華さを競った神輿以外に、祭りのたびに新しく作り、祭りが終わると壊す神輿もあったことを伝えている。毎年新しい植物で神輿をつくり、葉が枯れる前の色鮮やかなうちに祭りを行うことが、神聖な乗り物として重要だったのである。



写真9 杉葉で葺いた子ども山笠（2015年）

文学部教授